「あいち森と緑づくり事業」より交付金 90 万円！

本年度から愛知県では森と緑の整備・保全のための税を徴収し、事業を進めているところですが、この税を財源とした「あいち森と緑づくり環境活動・学習推進事業」に応募したところ、提案が認められ交付金 90 万円が交付される決定をいただきました。申請書に書いた提案により、次の事業を実施することになりました。多数のご参加をお待ちします。

秋の観察会 in 段戸山

―植樹した樹木の成長を観察し、秋の紅葉を楽しもう！―

段戸山にて 5 年間に植えた樹木は２６種類 5000 本を越しました。わが子と同じようにたくましく成長した姿を見に行きませんか？その足で段戸裏谷原生林を散策し秋の紅葉を楽しみます。専門家の解説で自然が発するメッセージに耳を傾けましょう。あなたの心が豊かになり、心身ともリフレッシュ！

1、開催日時　平成 21 年 11 月 8 日（日）
2、集合出発　８：００
3、集合場所　安城市歴史博物館
4、参 加 費　無料
5、弁　　当　各自持参
6、日　　程
　・　８：００　　集合出発（安城市歴史博物館）
　・１０：３０　　開会式
　・１１：００　　観察会　（設楽町・水源の森）
　・１２：００　　昼食（各自持参）
　・１３：３０　　観察会　（段戸裏谷原生林）
　・１５：００　　現地出発
　・１７：００　　安城市歴史博物館着予定
7、その他
　・少雨決行します。雨具を用意してください。
　・マイクロバスにて現地まで案内します。
8、申し込み
　9 月 30 日までに野村幸示さんまで参加者氏名を報告してください。Tel：0566－７５－５５７７

森づくり講演会

「自然保護大国でなければ、21 世紀は生き残れない」
～クマたちが棲む、豊かな森を次世代へ～

1、日　時　　平成 21 年 11 月 28 日（土）
2、場　所　　安城市文化センター大会議室
3、講　師　　森山まり子氏（日本熊森協会会長）
4、参加費　　無　料
5、申し込み　11 月 20 日までに野村幸示さんへ氏名を連絡ください。
6、懇親会　　講演会後講師を囲んで夕食会を行います。参加費 3 千円程度

設楽ダム建設中止を求める

立木トラストへの参加呼びかけ

建設に向けて動き出した設楽ダムは大変問題があります。時代は変わり、ダムを造ることは慎重であらねばなりません。なぜなら、ダム建設による自然破壊は甚大だからです。自然保護や山村の活性化はダム建設とは関係ありません。初めから「ダムありき」でなく、次世代のために、人間の英知を結集しようではありませんか？

立木トラスト申し込み方法は
●問い合わせ先：E-mail:ichinok7@mx3.tees.ne.jp
　Tel:0532-54-7305（奥宮）
●申し込み先：〒440-0069 豊橋市御園町１－３　奥宮芳子（事務局）
●申し込み条件：個人で申し込んでください一人一本限定です。一本 500 円
●申し込み方法：立木代金 500 円と立木売買契約書をお送りください。

契約書は下記よりダウンロードするか、
電話０５３２－５４－７３０５（奥宮）まで
http://no-dam.net/nyukai.html

NPO 法人 **森を再生する会会報**

第 19 号
平成 21 年 8 月 1 日

ホームページをご覧ください。http//www.Katch.ne.jp/~kamiyaf18

‘09 春の植樹祭を終えて

理事長　神谷　輝幸

今年の春の植樹祭は、朝から雨が降る中で行うことになりました。それでも会員はじめ、77 名の方が参加していただきました。植樹祭は今回で 11 回目。スギ・ヒノキをほぼ皆伐し、植生調査に基づいて、昔からその場所に生えていた樹木を植樹して、生態系豊かな森に再生しようと今回は、ブナ、コナラ、ヤマザクラ、ホウノキなど 480 本を植えました。

雨の中の開会式では役員らの「人間にとっては不都合でも、植物にとっては恵みの雨です。」の呼びかけに納得し、７７名の参加者は急斜面の段戸の山に 30 分ほどで植樹を終えてしまいました。山から降りてきた人々からは、雨にぬれながらも、「楽しかった」「良いことをして気持ちがよかった」などと言う感想の声が聞かれ、皆、満足そうな表情だったのが印象的でした。その後、地元で作られた山菜ごはんやチラシ寿司で昼食をとり、役員手作りの竹の食器に盛られた豚汁で体を温めました。食事後は、今まで植えた木の観察会を 1 部の人で実施し、成長した木を眺めながら環境生命学博士の吉野知明氏から「荒れた森を生態系豊かな森に転換する植林活動は全国でも珍しい、今後も継続して見守る価値のある活動です。」などの説明に、私たちのこれまでの活動は本当に意味のあることだということが再認識されました。

撮影　高野

最後にエピソードをひとつ紹介します。当日、朝早く古地　温さんから「雨の対策でシートを張るので早く出かける」と言う電話がありました。後で聞いてみると杉浦良和さんが「こんな日は俺の出番だ。」ということで古地さんを誘い、二人で雨除けのシートを張る作業を買って出ていただいたのでした。

この他にも、会員の皆さんのまさにボランテイア精神に基づいた行動で雨の中の植樹祭が何事も無かったように終えられたのだとつくづく有難く思います。

なお、この植樹活動は社団法人国土緑化推進機構「緑の募金公募事業」の助成金を受けて行われたもので、段戸山において今年で６年目、これまで
・２９種類
・6、９９０本
を植えることができました。

← ヤマザクラ

→ ブナ

← ホウノキ

→ コナラ

‘０９植植樹祭に寄せて

今年の植樹祭には、若い人が目立ちました。その中でも宮脇昭先生の教えをまっすぐに受け止めた愛弟子のエスペックミックの吉野さんに、いらしてしていただきました。午後からの観察会を楽しみにしていたのですが、あいにくの雨に阻まれました。

その吉野さんからお手紙をいただきました。

神谷輝幸様
NPO 森を再生する会の皆様

エスペックミック
吉野　　知明

先日の植樹祭では大変お世話になりました。
あいにくの雨でしたが、480 本植栽完了できたのは皆様の熱意の賜物だと思います。
霧に煙る設楽の山も渓流から聞こえてくる鳥の声（ミソサザイでしょうか）などもさわやかで、とても気持ちのよいものでした。また、植樹後の豚汁やおこわ、手打ちのおそばなどもおいしく、本当にありがとうございました。
2006 年秋植樹、2007 年の植生調査以来の段戸の山でしたが、植えた苗木も良好に生育しており安心いたしました。植栽した苗木は 20 数種の潜在自然植生の主要な構成種群ですが、それ以外にも、植栽していない低木類（シロモジ、アブラチャン、ヤブウツギ、ウツギ、アセビ、ニガイチゴ・・・）が自然に多数生育し、植えた苗とその土地の苗が相まって若い樹林を形成していることがとてもうれしく思いました。
樹林地を間伐・伐開した場所での植栽事例はいくつかあるのですが、植栽後に少なからず外来種が目立つようになります。たとえば、里に近い山では、ハルジオンやヨウシュヤマゴボウ、近くに荒れ地があるようなところでは、セイタカアワダチソウ、オオアレチノギク、ヒメムカシヨモギなどの外来種が発生し、しばしば苗木を被圧するほど繁茂します。段戸の山を見た限り、そのような外来雑草はほとんどなく、ほとんどが在来の草木でした。やはり潜在能力の在る山だと感じました。

2006 年には真っ暗な人工林だった場所が（添付写真 Before2006 年撮影）明るく間伐・抜開されて

（2006 年撮影の間伐、抜開前の暗い人工林）

（明るく切り開かれた段戸の山 2009 年）

2-3 年経てばその土地に見合った木々によって小さな茂みが出来る（添付写真 After2）という事実を見ると緑のダム作りの意義がより一層見えてきた感じがします。暗い人工林に対する問題意識や人工林の針広混交林化といった課題に対しては、複相林施業などのように、林床を明るくし天然更新を図る、

免疫の話

近藤　隆治

森を作り再生することは、地球が供えているべき免疫力を復活させる仕事の様に思えます。

人間の体も、健全に保つためには、正常な免疫力が保たれることが非常に大切だと思われます。

その免疫とは何か、それは、自分と自分以外を区別して、非自己を排除する働きと定義されて居ます。一口に言えば、病気に対する抵抗力を免疫力と理解できます。

病んでしまった山を、どうしたら自然の治癒力として保有し回復できるか、再生する会の活動もこの話の先にあるように思えます。　山は、適切な樹木の被服で覆われていることが、健康の証でしょう。人間も、着衣の良否で健康を左右されます。化繊よりも天然質の繊維を利用すべきで、取り分け、肌に接する部分にはより繊細な配慮が必要です。最近、ある誌の記事から、下半身の肌着も麻繊維が免疫力の向上に大変有効というのを見つけました。

早速、麻布を購入して、一定の寸法に裁断し、紐をつけて腰部に着用しております。市販の「褌」は、何千円もしますが、手製すると、1/3 以下で作れます。化繊よりも綿、ベストは麻です。麻の実力を再認識する時代です。

“楽農園”収穫祭に寄せて

故郷Ｕ－ﾀｰﾝ５０余年　深津　隆

数年前、新緑ﾄﾞﾗｲﾌﾞで偶然立ち寄った下山村役場で頂いた資料の中に“ＮＰＯ段戸山・森の再生”活動の呼びかけがあった。ﾁｪｰﾝｿｳを使いながら快い汗をかき、森の空気を胸深く吸い、山野草の素朴な生命を眼にし、いつしかスッカリ健康を取り戻し得たことは望外の喜びであった。

やがてその活動は安城市矢作河畔の“楽農園”にも発展し、小生も喜んで自然農法・野菜作りに参加させて頂いたが、失敗と学びの日々となったのは当然であった。ｼﾞｬｶﾞｲﾓを植えても、その後の根寄せや芽欠きを全く知らず、青く小さな収穫となり、胡瓜はせっかく実っても週一の収穫では大きく真っ黒な“オバＱ”となっており、下山で頂いた菊芋の種の植え付けも大きく育った秋のある日、支柱を添えていなかったため台風並みの強風で全倒！

そんな中でやがて、玉ネギ・大根・カブなどが以外に育て易く保存の工夫も出来ると言う事で、旬の収穫を都会に暮らす子供達や兄弟に宅急便で贈る喜びを知るようになった。とりわけ、神谷先生のｱﾄﾞﾊﾞｲｽで多めに種を播いた大豆が豊作で、夏の枝豆での収穫がお裾分けしても食べ切れず冷凍保存し、秋の大豆としての収穫も十分で正月の煮豆だけでは食べ切れずかなりの乾燥保存となった。そこで今日５月２４日（日）の収穫祭に持参した一品は…黄色の大豆と緑色の枝豆＋白ﾁﾘﾒﾝｼﾞｬｺと赤干しｴﾋﾞを炒めたもの…ビールがあったら！！！それにしても昨今の産地偽装・消費期限改ざん・中国食材の農薬汚染・輸入ｶﾋﾞ米転売などなど・・・江戸時代には無かった言葉ばかりで、当時の清らかな農村風景と山紫水明を憧れるごとく想像しております。

自然との共生のすすめ

野村　幸示

地球上では森林が消滅し続け、二酸化炭素が増え温暖化が進んでいる。生き物が生きていくために必要不可欠な酸素を作るのは、この森林を含め草木の助けを借りなくてはならない。還元率の序列は無視しても、この草木が減少していくのは生き物にとって好ましくない。

また、私達が安全に美味しい水を得る場としても、山の存在も忘れてはならない。山の涌水、あるいは川から水を汲んで飲むことができる。海水を飲む人は余程でない限りいないと思う。井戸の水も飲める。水道が完備しているところでは考えたこともなかったが、水道水は殺菌処理された水であり、水分補給でしかないものである。そうでないならなぜ天然水とかを買う必要があるかである。

これから生き物が未来永劫、繁栄もしくは生き延びていくためには、この自然の摂理を念頭に入れ自然を守り、自然と共生をしていかなければならない。樹を切ったら、樹を植える、作物を収穫したら次の作物を植えましょう。壁面緑化、屋上緑化どこでもいいから緑を植えましょう、周囲の温度が下がります。森林を含め草木も、重要な役割をもってこの地球上にあるのですから。

窓と環境

杉浦　良和

ここで述べる環境とは、私たちヒトという生物の心身に、直接影響する住環境についてです。

「エネルギーの使用の合理化に関する法律」という法律が昭和 54 年に定められました。これに合うように、住宅の断熱の基準が 1980 年に示されて、この法のもとの優遇低金利などで一気に住まいが変わりました。住まいをビニールで包み、グラスウールで囲み、窓にサッシを使って高気密化が図られて、以来 30 年になりました。しかし、平成 15 年 7 月 1 日の改正建築基準法により、各個室に閉めることのできない外気取り入れの穴を設けること、場所により止めることのできない換気扇を設置することが定められました。

このことは直接的には、シックハウス対策なのですが、また別の面を持っています。いかに私たち人間にとって空気の流れが大切であるかということです。空気の比重 1 に対して炭酸ガス 1．5 と重いのです。酸素は軽く室内の空気は風を入れて動かさないと自分の吐きだす息（成人 1 時間に 17 リットル）、石油ストーブ、台所のコンロの二酸化炭素など住まいから出て行きません。

ヒトの脳が一番酸素を必要としている眠っている間に、新鮮な酸素の供給のない現代の私たち日本人は、脳が活性化していないのではないでしょうか。

自殺者は 3 万人を超え、裸になる大人がいる、我慢すること、判断すること、決断することなどができないのは、脳が酸素不足ではないでしょうか。

5 月 10 日の快晴の日。植樹祭準備のために山に登りました。作業を始める前のミーティング風景

山下さん

「チェンソーはあぶないですから・・・」

野村さん

「そう、そう　君、足切らないでね」

かつて野村さん、山下氏はその経験ありの人でした。

あるいは間伐後に少数種の広葉樹を植栽するといった、造林的な解決方法が模索されていましたが、林業的な発想であるため、結果が見えるまでに長い時間がかかるとともに、適切な植栽木の保育作業が必要になるものでした。

平成 16 年来、森を再生する会様で実施されているような、その土地にあった樹種を混植、密植し、数年経ったら自然の推移に任せる「宮脇方式」による積極的な樹林の置き換え事例は、あまり例がなく、山の再生に関心はあるものの、実行するにも将来的なビジョンが描きにくく多くの団体にとって手探りな状態といえます。

たとえば、苗木の生育状況、周辺からの植物の侵入状況、動物による摂食状況、維持管理の方法、それに伴う生態系の回復、渓流の水量変化、あるいは有志による会の運営のあり方など・・・

先行的な事例を持っている森を再生する会様が情報の収集・発信源となり、過去 5 年の実績をまとめて公表することができれば、他地域の団体にも良い情報、刺激になると思います。

今回は、雨のため十分な観察会のお手伝いが出来ませんでしたが、また 8 月に現地調査・観察会が出来ることを楽しみにしております。

作手村の森づくりプロジェクトを含め、今後とも宜しくお願いいたします。

（添付写真 After2　↓小さな茂みができた！）

雨の日の植樹も気が晴れる!

加藤　順弘

〈撮影↓高野　政浩〉

我々日本人は戦前まで里山を大切にしてきました。 そこから人々は、薪を集めて日々の暮らしのための火をつくり、田んぼや畑で使う大切な堆肥のもとが集められました。またそこから採れた山菜や野草は季節の味覚をも運んでくれたのです。

里山の自然は、多くの生きものを育んでおり、 知らずしらずのうちに生きもの同士の結びつきと調和のとれた関係ができあがって、それは完全な自然ではないけど、うまく管理された多様性ある生態系を持った豊かな自然であったと思います。

そんな里山に再生するための植樹が、雨に臆することなくお子さんをはじめ多くの人の笑顔と共に実施された現場を目の前にして、微力ながら少しずつ準備作業をしてきた私の心が震えるものを感じました。そして青空の下で新緑を見た時のすがすがしい気持ちに変わっていきました。参加した多くの皆さんや、準備作業に携わった多くの皆さんに感謝する次第です。

心に慈雨の植樹祭

古地　温

今回の植樹祭は近づくにつれ週間天気予報は雨天、外れることを期待しながら多少の降雨はやむを得ないことを覚悟する。当日まで幾度もみんなと準備のため通い続ける。後一ヶ月に迫り案内版を作成、地元の方たちにお願いし、各所に二十数本を立てる。果たして見やすい場所だろうか…。気にしながらも、やっと終え、後１週間を待つばかりとなった時、斎藤さんから「三ツ橋方面からは落石あり通行止め」との連絡を受ける。早速翌朝落石現場に行くと大きな石が車を直撃その凄まじさは山の荒廃が原因だろうか・・・。恐怖を改めて知る。案内板も急遽書き直しを余儀なく再度建埴に行く。

地元の人たちの生活を尋ねると、部落周辺に生い茂っている山は半世紀前頃まで、草刈場として田畑の堆肥や、、家畜の飼料にされていたという。

途中部落周辺は、もう田植えも始まっており長閑だったであろう昔を想像する。そこには多くのせいぶつがせいそくし子供たちには格好の遊び場であり。生態系のバランスも取れていたという。

当日の植樹はなれない急傾斜面、予報通りの降雨、足場も悪く滑りやすい悪条件は自然の厳しさを知る良き思い出の体験でもあった。

“ 雨は新緑を増し、いっそう美しくする ”

植樹は緑のダム作りともいう。

近くではダムの建設計画が進められているが中止した県もある。果たしてどちらが正しいかは何十年後でないと分からないかもしれないが緑なくして水は流れず、水流れずしてダムに水は溜まらない。今回の植樹は初体験だった若い方たちも多かったと思う。これからも積極的に参加され将来、若い方たちの案内者として、そして次の世代へと…。いつまでも限りなき美しい緑のダムづくりを守ることを願ってやまない。

「どうしたら直せるのか、わからないものを壊し続けるのは、もうやめて」

伝説のスピーチと言われた少女ももう 29 歳になる。地球は子孫からの借りものである、早くきれいにして返さないと取り返しがつかないことになる。

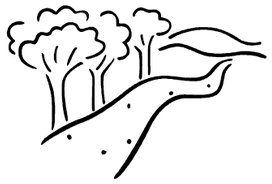
「我、サンチョパンサになる」

～ドンキホーテを支える決意～

安城学園高等学校長　　坂田成夫

サンチョパンサは小説「ドンキホーテ」の中でドンキホーテと旅をする従者です。ドンキホーテ村の領主で、仲間のためならどんな困難にも立ち向かってゆく愛と勇気の騎士ドンキホーテ、そのドンキホーテが大好きで無鉄砲とも思える行動をハラハラドキドキしながら支えるのがサンチョパンサです。

今回の植樹祭の場所を提供してくれた段戸の斉藤和彦さんが以前「我、段戸のドンキホーテになる」と文章を書いて送ってくれました。胸を熱くさせる文章でした。段戸の地で水源を守る斉藤さんの生き方はドンキホーテを髣髴させる生き方だと思います。ドンキホーテになれない人はたくさんいます。しかし、サンチョパンサには少しの努力でなれるように思います。「森を再生する会」の活動は安城の３つのライオンズクラブの方が中心になった「NPO いのちの森実行委員会」を今年安城の地に誕生させました。2009 年 3 月 8 日（日）には赤松町のデンパーク西、半場側河川敷で第１回の植樹祭が行われ、600 人を超える市民の方が「陽光桜」の苗木を植えました。数年後に安城の桜の最大の名所の一つになります。「ＮＰＯいのちの森実行委員会」は今後、安城市民と同じ本数の１７万５千本を市内に植樹していく計画をしています。「まずは一歩を踏み出しました」と宣言した「いのちの森実行委員会代表」の中川暉国氏、森を再生する会の代表で「いのちの森実行委員会」の生みの親の一人でもある神谷輝幸代表も斉藤和彦さんとともに私にとってのドンキホーテです。私も時にはドンキホーテをめざし、多くの時間は多くの人のサンチョパンサでありたいと思います。今年も「森を再生する会」の皆様よろしくお願いします。



「マンサク、見ぃつけ！」

（マンサク）

丸山　夕起子

早春の一日、作手にマンサクの花を見に行こうと誘われて出かけました。

山道のところどころで、車を停め、谷川のせせらぎの聞こえる中、雑木林に目を凝らし、青空に広がる枝の先々に可憐に咲く黄色い花を見つけました。

「あそこだよ」と指を指されても見つけるのに苦労します。「この黄色の細長い四弁の花を持つマンサクは、四恩の花とも云われてるんだよ。一本目は父の恩、二本目は母の恩、三本目は師の恩、そして四本目は友の恩。私が 18 の時、尊敬する先生が、作手にマンサクを見に行こう！って連れてきてくれたんだ。」誘ってくれた方は懐かしそうに私たちに語ってくれました。

そして、作手の盆地を流れる川の土手で、おいしいお饅頭を食べ、抹茶をいただきました。春とは名ばかり、ガタガタ震えてくる寒さの中で飲んだ抹茶は、今聞いた「四恩の花」の話と共に私の体の中に浸みわたりました。

以来、春になると友達を誘ってマンサクを見に行き、初めての方には、知ったかぶりをして、四恩の花の由来を話したりしています。

慌ただしく日々の暮らしに追われている私たちですが、自然との関わりの中で、胸にしみるというか、腑に落ちる記憶をどんどん貯えていくことによって、心に豊かな余裕が生まれてくるように思われます。

「自然を大切に！」なんて、お題目を唱える前に、毎朝、通勤途中に見る街路樹でもいい、自分の好きな樹をみつけて、時折、定点観測をすることから始めてみませんか？「私の樹」が一本ずつ増えていく。それぞれの樹の違いが見えてくる。季節の移ろいを敏感に感じるようになる。不思議に訳もなく楽しい。

私には、水源の森に木を植えることも、安城のまちなかに多くの樹を植える構想も、人が育っていく過程とダブって見えます。

これから育っていく若い方々や子育てに忙しいお母さんたちが、自分を取り巻く自然と自分との関わりの“ エピソード ”を数多く持てるといいなと思います。　私は、会員の皆様のように汗を流しての協力を何一つしておりませんが、片隅で、生け花やお茶を通して、まわりの方々と“ 心にしみるエピソード ”を増やしていきたいです。

植樹祭に参加して

荻野　留美子

今年も、段戸山での植樹祭に連れ合いとともに参加しました。すがすがしい春の山で森林浴を満喫しようと楽しみにしていたのですが、あいにくの雨になってしまいました。しかし、雨にぬれた木々の緑が一段と映えて綺麗でした。

開会式の後、鍬と植栽用の木を５本持って登りの列に並びました。シトシトと降る雨は、見かけによらずしっかり重みを持っていて、山の急斜面では滑りやすく危なかったのですが、一歩一歩足元を確認しながら登りました。ずいぶん高いところまで、しっかり道が作ってあり、事前準備をしてくださった人たちに感謝でいっぱいです。おかげで、山に素人の私たちにも、安全に高いところまで登ぼれました。雨は冷たかったですが、その雨のおかげで、小さな移植ごてでも穴を掘る事ができるほど、地面がやわらかで植えやすかったし、木もしっかり根付いたことでしょう。10 本ぐらい植えたところで私は降り始めましたが、転ばないように登りより気を遣いました。つれあいは何度も木を取りに来て、また上に登りたくさん植えたようで、雨も気にならなかったととても満足そうでした。昼近くになると雨が一段と激しくなりましたが、熱くて美味しい豚汁と山菜おこわは体の芯まで温めてくれました。美味しかったので２杯目の豚汁もいただきました。竹の器はおしゃれで野趣に富み、竹の香りが素敵でした。持ち帰ってきた器は、花器にしようか、花を植えて楽しもうか、いま思案中です。

まだ後片付けをしてくださる人たちがいらっしゃるので申し訳ないなと思いながら、昼食後すぐ帰路につきました。緑に囲まれて充実した１日を過ごすことができました。ありがとうございました。